

氏名（本籍）	高柳 真人		
学位の種類	博士（カウンセリング科学）		
学位記番号	博甲第	7390	号
学位授与年月	平成 27 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	シャイな教師の教職遂行を規定する認知的要因に関する研究		
主査	筑波大学教授	博士（心理学）	藤生 英行
副査	筑波大学教授	博士（心理学）	大川 一郎
副査	筑波大学教授	博士（人文科学）	安藤 智子
副査	東京福祉大学	教育学博士	田上 不二夫

論文の内容の要旨

（目的）

教職は対人的な職業であり、学校での対人関係が、主要なストレスの一つとして、わが国の教師にさまざまな影響を及ぼしている。本論文では、わが国に相当数存在すると考えられるシャイな教師が教職遂行過程で困っていることを実証することを目的とし、シャイな教師に困った経験をもたらす認知的要因を明らかにしそれがシャイな教師に困った経験をもたらすメカニズムを解明することを目的として行われた。このことが解明されると、対人関係で困っている教師の支援策を検討する上で有用な知見を提供できると考えられる。

（対象と方法）

わが国の小中高校教師約 35 名から約 460 名、大学生約 195 名から約 403 名を調査協力者とした質問紙法をもちいた研究を実施した。研究 1 から研究 4 まででは、シャイな教師の教職遂行の実態に焦点を当てた。また、研究 5 から研究 9 までは、シャイな教師の認知と教職遂行の関係に焦点を当てた。

（結果）

シャイな教師は約 4～6 割存在し、授業や職員会議の時、上司、同僚、生徒、保護者と一緒の時、シャイネスを喚起される者が一定数いる(研究 1)。シャイな教師の行動特徴として「行動抑制」及び対人不安を反映した緊張やあがりに関連した「情動混乱」の 2 要素が見出された(研究 2)。大学生調査から、教師が児童生徒に関わろうとしない「行動抑制」に対して、教職を「遂行していない」という評価がなされ、「遂行していない」と評価される教師は、ネガティブに評価されることが示唆された(研究 3)。また、シャイなため教職を遂行する上で困った経験を有するシャイな教師は約 7～8 割おり、困った程度が「やや深刻」より深刻な者が約 1 割いた。授業、個別指導、学級・HR 経営、職員会議、保護者対応

場面など対人的な教職遂行場面でシャイな教師が困っていること、シャイネス反応が困った経験をもたらすことが実証され、シャイネス反応を経験しやすいシャイな教師が困りやすい教師であると考えられた(研究4)。対人的教職遂行場面での困った経験と関連した認知的要因として、教職遂行場面を困難場面と認知すること(「困難場面認知」)、相手を味方と認知すること(「対象サポート認知」)、シャイではうまくいかないというシャイネスの働きに対する「シャイネス評価」、教職遂行場面において対人行動をうまく遂行できるという信念である「教職対人行動効力感」が見出された(研究5)。それらを測定する尺度を作成し、困った経験との関係を検討すると、いずれも困った経験と関連することが示された(研究6～研究8)。また、各要因間の関係を踏まえたモデルを検討した結果、「困難場面認知」や「対象サポート認知」が「シャイネス反応」をもたらし、それら3要因が「教職対人行動効力感」に影響を及ぼし、「対人的教職遂行場面での困った経験」につながっていくというモデルが構想され、そのモデルが一定程度適合的であることが示された(研究9)。

(考察)

本論文の目的である、対人的な教職遂行場面で困っているのがシャイな教師であること、シャイな教師の認知がシャイネス反応を介して困った経験をもたらすメカニズムを実証することができたと考えられる。シャイなため困っているシャイな教師は相当数存在し、円滑な教職遂行を進めるための支援が必要となろう。本論文の成果を踏まえた具体的支援策として、シャイでない教師との「教職遂行場面評価」や「対人評価」、「シャイネス評価」の違いを踏まえた認知的介入を行うことや、自己教示訓練、社会的スキル訓練といったシャイネス反応低減策の取り組み、「教職対人行動効力感」を上昇させるカウンセリング学習の実施などが考えられる。

審査の結果の要旨

(批評)

高柳真人氏はシャイな教師の教職遂行に影響する認知的要因について、教師対象の質問紙調査、および学生対象の質問紙調査による9つの研究を通して検討している。特性および状況的なシャイネスに関する研究は国内外のデータベースでたくさんヒットする。しかしながら、本研究で焦点が当てられるシャイネスを訴える教師の悩みや困難、その教職遂行に関する研究については、世界中を見渡しても例を見ない。教師のシャイネスの影響については、本研究が唯一の研究であるといえよう。教員および大学生への調査に基づいて、この希少である点に焦点を当てている本研究は、高く評価できる。高柳真人氏の研究は、これまで焦点が当てられなかったシャイな教師の教職遂行を改善するのに必要な要因などの解明をはじめとした応用的な研究へと、今後、発展することが期待できる。

この研究領域における最初の研究としてオリジナルな視点については、高く評価できるであろう。

平成27年1月30日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(カウンセリング科学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。